

Fair Wind



2005 Autumn

1. 広報委員長あいさつ

日本大学3年小山

秋号だけど事実上に冬号になってるんじゃない？という声がちらほらと聞こえてきそうなくらい遅くなってすいません！菊地さんから広報委員長を引き継ぎました日大3年小山です。最近朝晩めっきり寒くなってきましたね～。

さてさて秋号のラインナップは

1. 新主将挨拶（今回はKCCの藤本さんっす）
2. あたらんの思い出
3. 夏クルの思い出
4. クルー乗せ換えの感想（2年）

の4本立てです！原稿集まりきってないような気がするんですけど、待ってもしょうがないっぽいので。しかしながら、1人の天才の出現によって、前号より一部だけかなりボリュームアップしているので読み応えあると思います！それではどうぞ。

2. 新主将あいさつ

『新 KCC 発足』

慶應義塾大学3年 藤本裕亮

どうも毎度お世話になっております。これから慶應クルージングクラブ (KCC) の主将を勤めさせていただきます、藤本裕亮です。どうぞよろしくお願いいたします。

これからひとつ目標に掲げたいのが、サークル全体の、ひとつのチームとしての一体感を生み出すことです。KCC のいいところは、みな仲がいいということです。一見単純ではありますが、最も重要で肝心なことだと思っています。しかし、ただ仲がいいというだけではいけません。一人一人が KCC の大切なクルーであり、1ピース抜けただけでこのパズルは決して完成はしない、その代わりもないんだ、という意識を一人一人に持ってもらいたい。それが私の本心でもありますし。その先に見えるサークル全体の一体感が生まれれば、きっと今よりもっと素敵で素敵なサークルになるでしょう。そもそもクルーザーヨットというものの自体の核は、この点にあると考えています。

それから、今年はヨットを楽しむということを意識してやっていこうと思っています。クルージングはもちろんのこと、普段の練習の時ですら、もちろん真剣にやりますが、その中で楽しむこととの共存は、絶対可能だと思います。ヨットってそもそも、楽しいものだから。

これからも、学連の中では異色なあの KCC の雰囲気をもガンガン前面に出しつつやっていきます。改めまして、新 KCC をよろしくお願いいたします。

3. 熱海ランデブーの思い出

東京大学2年 西村

ちわっす!東大2年の西村です。今回のあたらんは私にとって初のあたらん&3年生以上がJ/24の世界選手権に出場していたため1年の松屋と2人きりの参加でした。行き帰りやレースでくろしおに乗せてもらった事もあり(黒川さん、柵山さんありがとうございました!)他大と学年を超えた交流が出来たのが一番の思い出です。運動会では、日大千葉大と合同チームで頑張ったし、レースでも学年関係なくみんなで色々なポジションを回したりしたので、私を含め下級生にはいい経験になりました。夜も飲んでると色んな人の意外な一面が見られて楽しかったと同時に、他大の先輩から色々な話が聞けたのはすごい自分にとってためになったと思います。今年の一年生は女の子たちがパワフルでうれしいなあと思ってるのでこれから先のイベントでも上下関わらずもっとたくさんの人と関わって頑張っていきましょう☆では失礼します。

武蔵工業大学1年 加藤

まだヨットを始めて間もない自分にとって、アタランで経験した事のほとんどが新鮮な事ばかりだったと思います。

熱海へ向けて出港した早朝、航海灯の灯る船の様子を初めて見ることになり、また、二日目のレースでは、自分は幸運にも船に乗せて頂き、今までのクルージング・ワークとは全く違うレース・ワークを雰囲気だけ実感できました。

今後、これらの経験を、これからの練習に繋げる事ができるよう、意識していきたいと思えます。

3. 夏クルの思い出

『夏の思い出』

防衛大学校ヨット部 3年 安達拓郎

夏と言えば、、クルージング！！と学連の学生なら必ずかえってくるように今年の夏、私達防衛大学校のヨット部はクルージングを行いました。やはり夏の思い出はこのクルージングのことしかないだろうと防大の夏クルージングについて書きます。

はじめに簡単にですが今年の防衛大のクルージングについて説明します。今年の夏のクルージングは全日程が9日間で行われました。ホームポートの走水から油壺、江ノ島、伊東、下田、式根島、新島、走水と島周りのコースを今年はとりました。船は防大の訓練で使用するアカデミー11（30ft）、アカデミー12（30ft）の2艇と監督である長嶺さんの船のブルーシャークの全部で3艇での行動をとりました。ブルーシャークのクルーの方を含めて20名前後と大所帯での行動となりました。

このクルージングでの思い出は、江ノ島で出会った海賊船の船長さん、新島でのボディーボード初体験、各艇対抗カレーライス選手権とさまざまな思い出がありますがその中でも印象深い事について話そうとおもいます。

その一つが下田での思い出です。下田の思い出といたら誰もがわかると思います。そう「とんかつはじめ」です。下田に入港して予約の電話を入れると「ヨット部の学生！？じゃあミックス18人前でいいね！？」と威勢のいい声。威勢のいいのはわかる気がするのですがなぜかメニューまで決定されるのはわからない。だけど自分は1年や2年ではなく3年ということでここは「じゃあミックス18人前で！！」と返事をしておくことに。もうひとつの下田名物の昭和湯にはいり（昭和湯に入ることを考えて日焼けしないようにしたが結局自分には熱すぎて湯船には入れなかった、、）とんかつはじめにみんなで出かけた。予約の時間につくとすでにテーブルにはミックス定食が18人前用意されているじゃありませんか。はじめ初体験の1年生の両隣には当然のごとく去年はじめの洗礼を受けた2年生が陣取り、おじさんおばさんと一緒に1年生のさらにキャベツやスパゲッティを山盛りに盛っていった。とんかつはじめの山盛りというのはほんとうに山盛りで日本昔話にでてくるような山盛りなのはヨット部の常識。その後のご飯、味噌汁のおかわりとおじさんとおばさんの心温まるサービスが続いた。そんなわけだとんかつはじめからでてくる時1年生のおなかがパンパンなのはもちろん、2年3年もおなかをパンパンにふくらまして船へと帰ることとなった。

まだまだ思い出はあるのだけれど全部を書いたらほんとに日が暮れるのでこのくらいにしておきます。今年の夏クルージングはもう終わってしまったけれど、来年も夏があり海がありそこにヨットがある。きっと来年は今年よりも、もっと楽しいクルージングになる予感がある。

『2005年度 夏クルージングを終えて』

武蔵工業大学2年 丸茂一貴

今年の夏クルージングは比較的天候にも恵まれ、非常に充実したクルージングとなりました。1年生は夏合宿のような緊迫したムードではなく非常にリラックスして（もちろん出航前や湾内などではリラックスなどできませんが）磯遊び、新島でのサイクリング、白浜海岸でのナンパなど夏クルの醍醐味を存分に楽しんだようです。

自分達2年生も存分に楽しんだのですがクルージングする上で重要となるナビの仕事もあったので緊張感をもちつつ、艇を自分達で動かす喜びを改めて知ることのできたクルージングだったと感じています。

来年にはヘルムスとして実際に舵をとりクルージングを安全に行うという責任があるので一年間で様々な知識、経験、技術を学び2006年度夏クルージングに望みたいと思っています。

『TOP OF THE SUMMER』

慶應義塾大学1年 井口和宏

真夏の激しくもどこか居心地の良い、そして気持ちを最高にまで高めてくれるあの暑さは、もうどこか過ぎ去ってしまった。でも僕は、今でも鮮明に思い出すことができる。あの走馬灯のように駆け抜けた、15日間の夏クルージングのことを…。

7月31日午後11時、新キャプテン藤本さんの「出るぞーい！！」のかけ声とともに僕の人生初のクルージングの旅が幕をあげた。この日のために、整備合宿や様々な荷物な準備などを重ねていたこともあってか、もう僕の頭の中はこれから先の旅の出来事の想像でいっぱいだった。

そういえば入学したての4月に、新歓で皆川さんが僕に言った「見渡す限り、辺り一面海しか見えない時もあったよ！自分たちだけの世界みたいだった！」という言葉がふいに思い出した。これからはそんな経験ができるのか、と思うと少しの不安と、それをものともしない程の期待で、胸が熱くなった。

そんな意気込みであったが、最初の目的地の下田までは3時間交代のワッチ制であったため、僕はソッコー寝ることになってしまった。

「起きろ〜！」という声で寝起きが悪い僕はなんとか目を覚ました。起きようとしたら、天井に頭をぶつけてしまった。

「そっか、今日からは船で寝泊まりしているんだった…。」

などと思いながら、狭いクォーターを出た。情けないことにまだハーネスを付けられない

僕は、伊藤さんに付けてもらい、デッキ上に上がった。

「すごい…。」

その景色は、普段都会の生活に慣れている僕には、なにかもう一つの世界に来たかのように感じられた。満点の星空に、波のしぶきにつられて青白く光ながら寄ってくる夜光虫の群れ。その光景は、幻想的という表現がまさに適しているだろう。こんな時は、ケツメイシの『よる☆かぜ』が最高にマッチする。

夏クル最初のナイトクルージングを終えて着いた港は下田だ。ここでのメインイベントは、『とんかつ一（はじめ）』という量がめちゃくちゃ多いお店の食事を完食することだ。唐揚げ13コにカレーにスパゲティ…そして、ようやくなくなったと思ったおかずが、よそ見している間に店員のおばちゃんにまた入れられて復活、なんてこともあって、みんなもう腹がパンパンに膨れてしまった。ここで満足感に満たされながらすぐに眠れたら最高なのだが、日常生活を支える1年生はジョブ（仕事）だらけ。しかも、1年生は小俣、坪田、僕の3人だけしかいないため、やることは本当に多い。ビルジ・水タン・チャージングの魔の合言葉を元に、買い出しや翌日の食事の準備、洗いものなど、初めて挑む僕達にまさに休むヒマなどなかった。結局、4時起きなのにジョブを終えたのがなんと2時という始末だ。そして朝起きることが何より苦手な僕が、なんといきなり起床係になってしまったので、これはもう寝てはいけない、と思い1人コンビニで時間を過ごすことにした。だが、あまりにもやる事がなくなってしまったので30分前にエオパに戻ったところ、急激に睡魔が襲ってきて、あろうことか僕は深い眠りについてしまった。結局、金子キャプテンや近藤さんと一緒にガソリンスタンドで寝ていたという小俣に、僕は起こしてもらったことになったのだ。「小俣、ありがとう！」

夏クルが終わってから思うのだが、この下田の日が一番キツかったように感じる。やっぱり、慣れないジョブに対する疲労が大きかったと思う。この3人のジョブの連携がとれるようになるのは、もう少し先のことになる。次は、夏クル中でも思い出深い『遠州越え』だ。ここでも2班に分かれ、3時間交代のワッチ制で進んでいく。僕はA班になった。そして伝統的に夜食としてカップ麺を食べて楽しむのだが、調度音楽を聴きながら気持ちのいい時間を過ごしていた深夜2時頃、忘れがたい事件が起こってしまった。

「そろそろ腹減ってきたなー、ラーメン食おーぜ！」と金子主将。

「ヨッシャ腹減った腹減った。」一同はノリノリのアゲアゲだ。

「じゃあ、お湯入れてきまーす。」と僕は昨日買出ししておいたカップ麺を取り出しにいった。もうB班はラーメンを食べたみたいだ。ゴミ袋を見ながら思った僕は、ある異変に気づいた。

「ラーメンが2つしかない・・・」

前日に6つ買って、3つずつを分けながら楽しく食べようと考えていたのに・・・僕はすぐ主将に報告した。

「金子さん、ラーメンが・・・ラーメンが！！」

「どうした！？ラーメンが2つしかないだと・・・??」

主将はこれ以上ないかと思われるような驚愕の表情を見せた。

「うそやー！遠州唯一の楽しみを・・・」と、嘆いたのは小室さん。その目にうっすら輝くものが見えた。

「これはクルーワーク及び日常生活の根本に関わる大問題だ。みんな、今回のこの事件を『遠州ラーメン剥奪事件』と名づけて徹底的に調査し、また遠州越えの伝統の事件として胸に刻み、後世に伝え残さなければならない。」と話す主将の握り拳はワナワナと震えている。

「そうっすね。でもどーやって調べましょうか？」近藤さんが尋ねた。近藤さんはなんだか燃えてきているようだ。目が血走っている。

「それなら、まずラーメン作った張本人を突き止めましょう。」と、うっすら不気味な笑みを浮かべながら、新主将藤本さんが提案した。

「はは、やってやりますよ！一発やっかりますよっ!!」小俣はハイになっている。マジでトリップ5秒前だ。

「よし、その場合尋問するのはB班唯一の1年、坪田だな。ワッチ終了5分前に審議会を始めるぞ！」

「あいよっ！」一同は声を揃えると共に、気持ちをひとつにした。

そして時間が来る・・・

「え～審議会を始めます。」と、小室さんが言った。

「うちのチームは2つしかないカップラーメンを、4つも作ったのは坪田君、君かね？」と、金子さん。まだ交代時間ではないのに起こされた坪田は不機嫌そうだった。坪田を起こした理由は、僕と同様、1年がお湯を入れると考えたからだ。

「俺じゃないっすよ。」

坪田の一言に、一同啞然。

「じ、じゃあ誰なんだ!？」

新キャプテンのモッティーさんこと藤本さんに焦りが・・・

「定山さんですよお。」

「!!!!」

坪田はどーでもよさそうに答えた。

「定山か～。これは定山にギャフンと言わせるしかないな…。」

金子さんの苦笑いする顔が印象的だった。

結局、僕たちが考えた定山さんへの罰ゲームは、定山さんには内緒で晩ご飯のおかずを激辛味にすることに決定した。ちなみにその後本当に、とある港の夕飯時、A班の諸先輩方の策略により、定山さんは口から大きな火を吹くことになった。そんなこともあって、無事に36時間連続の航海を終え、KCC一向は和歌山県の九鬼裏に到着した。久しぶりの陸の感覚にちょっと戸惑いながらも、九鬼裏の田舎っぷりには戸惑いまくってしまった。

コンビニはもちろん、スーパーもなければ電灯もほとんどない。あるのは、透明に近いスカイブルーの海と雄大な大自然と、おしゃれな喫茶店だけだ。いや待てよ、むしろ最高の空間じゃないか！ここまで田舎だと、日常のいざこざなんて、もうどうでもよくなってくる。今頃はイラクでは激しい紛争が起こっているはずだが、ここだけは戦争なんて全く関係ないだろう、そんな気分さえなってしまう。泳いでいる熱帯魚や、それを捕まえようとする子供たちを見ると、時間の感覚さえなくなってしまうそうだった。そして、『遠州越え』の疲れを考慮してくれたのか、この日はなんと晩御飯を4年生の人たちが作ってくれたのだ！メニューは豆腐ハンバーグ！！そして地元の漁師さんと仲良くなり、鰹のお刺身を分けていただいたのだ。なんて幸せな時間だろう！夜はたくさんの流れ星を見ながら、深い眠りについていった。

今日も例によって4時半起床で出航準備をして、5時出航だ。だんだん準備も板についてきて、僕たち1年生の3人は分担作業をしながら時間内に終わることができるようになった。次の目的地は串本、また6時間の船旅が始まる。

串本のレグからだろうか、僕は次第にMトリの役割を担うようになっていった。Mトリとは、数あるトリマーのなかでも最も難しいと噂の(?)ミュージックトリマーのことである。つまりみんなのその時のテンションに即応した曲を選曲するという、大胆かつ細心の注意が必要なお仕事だ…。とまあ、そんなこんなで串本に到着したのは良いのだが、ポンツーン付けができなかったので、僕にとって初の『槍付け』をすることになった。というか、串本での思い出はこの槍付けしかない。それくらい槍付けはめんどくさい作業だ。アンカーロープを最バウからとってきて、2点で固めてアンカーを決めて…。しかも、ここでなんと僕はお気に入りのサングラスを海に落としてしまったのだ！槍付けなのでジョブの効率も悪いし、こんな感じだったので、僕にとっての夏クル中の串本のイメージは最悪である。

そして串本の次は、お待ちかねの田辺！先輩から聞いた通り、ここのビーチは真っ白で人もたくさんいて、久しぶりに都会に戻ってきた感じがした。そして、白浜ビーチ1番のイベントはみんなビーチに行って、なかなかお目にかかれない須田さんの水着姿を拝見することができたことだ！すかさずカメラのシャッターを切りまく…あ、いや、コホン、ええ、小さなネオパに大きなボディボードに乗った甲斐があったと思えるくらい、遊ぶことに満足できた。そういえば1年のジョブの1つに、『力尽きるまで遊び尽くすこと』があったわけ。というわけで、近藤さんと一緒に沖の方まで泳ぎに行ったところ、水泳が得意な近藤さんは余裕であったのだが、一方の僕はにわか仕込みのクロールを使って、リアルに溺れそうになってしまった。ありがとう、ボディボードよ。ただの邪魔な荷物ではないことにやっと気づいた瞬間だった。

そんなこんなで、初ステイの田辺も過ぎてしまい、いよいよ残すはこの夏クル全体のメインイベントの大阪ステイと前半組の最終地点の徳島だ。だが、ここでは徳島に絞ってお話ししようと思う。なぜなら、大阪は大阪でとても楽しかったのだが、普段の生活とあま

り変わらないような気がしたためである。というわけで、15日間の長旅の終着点、徳島について記し僕の夏クルの回想を終えようと思う。

徳島では3泊のステイであったため、とにかく様々なことに挑戦できる時間があった。例えば眉山という徳島を展望できる山に登ったり、徳島ラーメンのために30分並んだり、お祭りの出店をチェックしたり…でもやっぱり1番印象的だったのは、阿波踊りである。ここに来るまでは阿波踊りなんてあまり規模も大きくなく、地味なお祭りなのかなと勝手に考えていたが、実際はそれとは全く違っていた。徳島の住人が老若男女問わず全員が参加して、観光客も含めて1つの『出し物』を作っていく。おそらくは普段は普通の父親であったり会社員であろうおじさんも、この日は赤の他人の目からしても単純に『カッコイイ』のである。この『阿波踊り』は、まさに徳島の象徴と言えよう。

そして、そんな阿波踊りにKCCの一員として、僕も参加することができた。酒を飲んで、浴びて、テンションをあげて、KCCらしく踊り方は本番5分前に覚える(?)というノリだった。「ヨットせい、ヨットせい!!」のかけ声をもとに、この夏で日焼けしまくった『イカツイ』集団は大暴走した!初めて会う他大学の人も一瞬で仲良くなり、ただ狂喜乱舞するだけだった。こんなにハジけたのはいつぶりだろうか、そのくらい楽しい時間であった。もっとも、10時天で一気に現実に引き戻されたのだが…。

とまあこんな感じで、僕にとって日常生活では体験できないことの連続の夏クルだった。常に何かに追われていた日常から解放された生活の日々は、時が経つにつれてその貴重さを感じることができる。思い返せば、大学に入ってクルージングをするなんて、浪人中は予想してもいなかった。なぜKCCに決めたのかは今でも分からないが、多分、いやきつとこれで良かったのだろう、そんな思いがこみあげて来るのだ。

最後になってしまいました、OBの方を始めとする僕たちを見守って頂いた関係者のみなさまには心から感謝いたしますと同時に、今後も変わらぬご支援を切に希望します。

『夏クルについて、特に印象に残ってることと言えば…』

甲南大学1年 水谷博

① 下痢

② 日焼け

などなど…。まず①の下痢とゆうのは…。同回の某K本君が極度の下痢になり、港に着く度に猛スピードでトイレに駆け込んでいたとゆうことです(しかも何度も何度も…笑)あんなに何度もトイレに行く人間を見たのは初めてです(笑)

続いて②の日焼け…。これはかなり焼けまくってもう顔の皮なんて何度むけたことか分かりません。な～んてことではなくて…。先輩が(誰とは言いませんがうちで1番権力を持つてる先輩です)洋上でいきなり全裸になりだして全身を焼いていたことです。しかも結局焼き過ぎてその日の夜の風呂に入れず…かなりくやしがってました(笑)先輩のあんな姿

が見れるのも夏クルならではなのかな？と…

とまあこんな感じで…来年の夏クルには必ず胃腸薬と日焼け止めを持って行こうと思います。

4. クルー乗せ換えの感想

千葉大学2年 高橋

ととろの森のような小網代で育った私が、初めて外界に放り出されました。派遣先は諸磯組のKCC。うわさの「諸磯漕ぎ」でネオパに上陸、久々に緊張しました。練習はコースラインに忠実に乗せての出入港や位置出し、リーフ、ジブチェンなどを行いました。久しぶりの位置出しでは大きな三角形を作ったりチャートの尺度の違いに気づかず1Mを10Mと報告してしまったりと、恥ずかしい失敗をしてしまいました。ジブチェンの際のジブシートの使い方は目からうろこが落ちました。次の日に早速実践しました…失敗したけれど。今回の一日を通してロングクルージングを行ううえでの位置出しやラインに忠実に乗せることの重要性を再確認し、次回、私の企画になるであろう夏クルの土台になったのではないかと思います。

慶應義塾大学2年 近藤

今回私は、武蔵工の清水と二人で東大にお世話になりました。その感想をひと言でまとめると、驚きの連続でした。まず第一に、私は今までJ24に乗ったことがなかったので、我々がネオパトスとのサイズや艀装・構造の違いなどに驚きました。また、東大の活動目的がレースであることは知っていたのですが、やはり私たちの長期クルージングも念頭に入れた練習とは、重要視する点が違っており、とても新鮮でした。さまざまな練習方法やクルーワークの工夫なども教えていただき、今後はネオパトスにも生かしていけたら良いと思いました。最近では下級生の指導に時間をさくことが多くなっていたのですが、今回の乗せかえは初心を忘れずに常に目標と探求心を持って練習に取り組もうと決意する、良い機会となりました。